



京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上慎一 教授



日本文理学部 人間力育成センター長 吉村充功 教授



首都大学東京大学院理工学研究所 福田公子 准教授

「主体的な学習」とは、「行為者(主体)が課題(客体)に進んで働きかけて取り組まれる学習」で、大学の学びに不可欠だ。主体的な学習は「課題依存型」↓「自己調整型」↓「自己物語型」という三層で深化する。最後の「自己物語型の主体的な学

習」は、「自分は何のために学ぶのか時間的な流れを組み込み、学習の意味を考えて課題に取り組み」こと。ポイントは「自己」。「高校時代から自分の『過去』と『将来』をつなげ学習を深める作業が必要です」と溝上教授。一方、学校教育の目的は「力強く社会生活を営める生徒の育成」。現代は知識を実社会・日常生活の問題を解決するために活用し、他者と関わる社会性が欠かせない。これらを育むのがアクティブラーニング(AL)。

功教授が「地域での学びと地域で活躍できる人材の育成」を講義。日本文理学部は文科省の「(知)の拠点整備事業」(○○)に採択され、「おおいだ、つくり」とプロジェクトを展開する。大分は少子化が進み、様々な地域課題を抱えているものの、製造業も多く産業構造のバランスはいい。だが地元出身の学生ほどその「魅力」を知らない。そこで大学では「地域志向科目」を大幅に増やす学修サイクルを確立。初年次は「地域での体験活動」で「気づき」を引き出す。例えば「四季の森プロジェクト」。学生たちは山に入り、林業従事者の声を聴き、「仕事のやりがいや意義」「生態系を丸ごと保全する大切さ」を体感する。「学生たちの人間力、ジェネリックスキルは確実に上がります。リアルな社会問題や本物に出会い、他人事が自分事になる。やりたいことを社会的意義から捉え直す視点も生まれます」。

●好奇心とチャレンジ精神を 究にも参考になるところだ。最後に首都大学東京大学院理工学研究科・福田公子准教授が「ゼミナール入試と自主研究―興味探索とチャレンジが導く自主性―」について講演した。ゼミナール入試は基本的な学力は有しつつ、一般入試で掬い取れない、「好奇心とチャレンジ精神」を持つ受験生を求めるもの。6月・7月・9月の「高校生ゼミナール」の受講が応募条件になる。「面白いのは生徒も私たちを選ぶこと」と福田准教授。課題研究やALで自ら考える経験を積んだ生徒は有利だ。後半で福田准教授は「自主研究」や高大連携での「課題研究」を紹介。現在、埼玉と東京の高校が合同研究を進めているが、「合同はいい。絶対負けたくない」と競争します」と効果大だ。最後に「4年での中退は主体性がないため。高校でぜひ主体性を」。パワーとユーモアに溢れる語り口に、会場は終始、興奮気味だった。

# キャリア教育から授業改善へ 多様な「共有」の姿

8月8日・9日、メルパルク京都で高校教育フォーラム2015が行われた。前身の「高校教諭のためのシンポジウム」から5回目の今回、エントリーは全国から284人。「キャリア教育の実践から共有へ」をテーマとした2日間を追った。

### ◆基調講演◆



●中退で生涯、不利益 初めにフォーラムの主催者、研究教育みらい・大堀精一が、今年のフォーラムの位置づけと、高校関係参加者の紹介を行った。そして本プログラムは、独立行政法人労働政策研究・研修機構特任フェロー・小杉礼子氏による基調講演「大学進学後のキャリア形成を考える―大学中退問題を中心に―」でスタート。大学・短大・高専の中退者は近年、増加傾向にあるが、その後のキャリアは困難を極める。



労働政策研究・研修機構特任フェロー 小杉礼子氏

◆大学の部◆ ●主体的な学習に向けて 大学の部は、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授による「主体的な学習からアクティブラーニングを理解する」からスタートした。多は「学業への興味関心の欠如。特に理系は「学業不振・無関心」が目立つ。人文科学・教育系は「家庭・経済的理由」が多い。「中退時の悩み」では「求職活動・仕事」が最も多く、自由回答にも「大学の就活の流れから完全にはみだしたので不安が大きかった」などがあった。以上から小杉氏は「大切なのは中退しない進路選択。大学の授業や学問への興味関心と同時に、勉強についていける基礎学力も大事です」と指摘。「学業継続を可能にする大学選びや、中退した時に、外部の就労支援機関につなげるのも大切」と語る。そして「誰かが大人にしなれば。世間知を知り、他者と交渉し、自分の身を守る生徒を育ててください」と結んだ。

パネルディスカッションでは、会場の先生方も小グループで各大学人への質問を議論。最後に2人が発表するAIも行われた。例えば「地域を相対化する視点は？」との問いに吉村教授は、「同じ県内の異なる地域を見るだけで違いがわかります。講義で学んで地域で展開する、逆向きのやり方もあります」と回答。また「ゼミナール入試の評価は先生方で一致しているか？」に福田准教授は、「成績中位層は多少分かれませんが、全体に変わりありません」と答えた。



福岡県立城南高校主幹教諭 下田浩一先生



北海道札幌旭丘高校 細田季男先生

一方、「主体的な学習の自己物語化の具体的なイメージは？」に溝上教授は、「教科学習でも将来を踏まえ、自己の物語につなげていくのが大事」と語った。

8月9日は長崎原爆の日である。原子爆弾が投下された11時2分、参加者全員で黙祷した。発声は昨年登壇いただいた、長崎県教育センターの舟越裕先生。「被爆者の平均年齢が80歳を超えるなか、被爆体験をいかに継承していくのかが大きな課題です」未来志向の平和学習を進めるため、AIも行わなければ。

舟越先生の言葉に、会場の先生方も思いを新たにされた。

村上育朗先生の特別企画後、ランチャタイム・ミーティングに入る。「参集された先生方、地域を越えて、熱く語り合ってください」と主催者を代表して、上村直之（学研教育みらい・学力開発発事業部長）が挨拶した。

### ◆高校の部◆

●自主自律の実現に単位制 次に高校の部。まず「実践レ

育」という理念が共有された。

その後09年度に将来構想委員会を設置し、CCS（国際社会におけるコミュニケーション能力と科学的態度を育てるキャリア教育）を打ち出し、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）1期の指定を受ける。

現在はSSH2期目で「授業改善」に取り組み。「じっくり時間をかけて形を作っています」と下田先生。会場ではドリ

### 特別企画 村上育朗VS若手高校教員

村上育朗先生と登壇したのは、島根県立江津高校の門脇勤先生と岡山県立津山高校の野崎拓司先生。門脇先生は「キャリア教育は以前の『生涯教育』に連なる。人としての生き方、あり方を考えるもの」。1年生のキャリア教育担当として、総合



教育未来研究会「そうぞう」 村上育朗先生

学習で地元の石州瓦をテーマに「瓦プロジェクト」を展開中。「自分で問いを立てて考え、課題を考える授業」を模索。一方、野崎先生は「一度きりの人生をいかに生きて死ぬのがキャリア教育」。前任の夜間定時制高校では、「社会に通用する力を身に付けさせる大切さ」「生徒の知的好奇心は従来型授業で喚起できない」など、生徒から教えられる日々だ。そして村上先生。「常に『問い』を投げかける」「生簀教育にしない」。授業では「既知のものを未知のものにする大切さ」を訴えた。

ポート」では、「本校のキャリア教育」を北海道札幌旭丘高校の細田季男先生が報告した。札幌旭丘高校では04年の単位制の導入を機に、21世紀「進学ADVANCE構想」を掲げた。「課題や現象の本質をきちんと受け止め、未来志向で物事を展望するとともに、大学合格への確かな実力と学問研究への興味関心や幅広い教養の育成を目指してほしい」との思いです。

生徒は14教科171講座から科目を選択する。生徒の自主性・自律性を涵養するのが「時間割作成」。生徒の希望を実現すべく、HR担任二人が面接（ガイダンス）を複数回行う。「とことん付き合います」と細田先生。科目選択に影響を与えるのが、総合学習「Sunrise Time」。1年次は大学入試システム研究から始まり、エントリーシートを作成、2年次以降は志望系統に応じたゼミに所属しつつ個人課題研究を行う。

この他、「出前講義（学問研究会）」や「大学でのノートテイキング技法」など、大学での学

びにつながる実践も報告された。●そして、授業改善へ

「城南高校であるために変わり続ける、それをやってきました」。こう切り出したのは、福岡県立城南高校主幹教諭・下田浩一先生。「城南高校が目指すキャリア教育、ドリカムプランの変遷と今」の報告である。94年、1学年担任団の危機感で始まったドリカムプラン。学習意欲を高める「生徒主体の進路活動」で国公立大合格者は飛躍的に伸びた。だが教職員の大異動やシステム疲労など環境が変化。05年に福岡県重点課題キャリア教育領域研究指定を受けた年、「存続の危機」にあった。

下田先生はこの年同校に赴任、キャリア教育研究委員会委員長を任せられた。熟議の結果、ドリカムプランは「総合的な学習の時間」にスリム化。その後2年がかりで「城南高校のキャリア教育」を再構築。部活動に力を入れていた先生の「部活動もキャリア教育」との言葉に、多くの先生方が「合点がいった」。「全ての学校活動がキャリア教

からの脱却を目指し、「5教科型の受験と後期まで受けける指導」を展開。県外の国公立大に目を向けて合格する生徒も増えた。課題の一つが「年齢構成」。

50歳代の先生が多く、4〜5年後には職員構成が大きく変化する。大前先生は「様々なノウハウの継承とともに、成長した生徒から学び、先生方を巻き込む進路指導を！」と抱負を述べた。続いて「被災地の学校で考えたこと」を語ったのが、福島県立相馬高校の武内義明先生。武内先生は生徒と共に「相馬高新聞」を編集してきた。大震災後は、「冷静になろう」「被災地にあるのは『真実』でなく、複雑で多面的な『事実』。それを積み重ねることが大事」と呼びかけてきた。震災38日後に新聞発行を再開。「読み手（生徒）を励ますもの」を心がける。

親も子も地元志向が強かったが、大震災で従来のライフサイクルが見えなくなった。「ふるさととは、自分が生まれた土地からとれた食材をうまいと感じられること。これが全部ダメにな

りました」。3年前からは生徒から「なぜ学ぶの？」「なぜ仕事に就くの？」「なぜ、生きるの？」「なぜ？」が溢れ出てきた。価値観が崩壊したため、作り変えようとしているのである。その中で唯一問われなかったのが、「しあわせになること」。「誰もがしあわせを求める権利がある。大学でも仕事でも、自ら選んだことがしあわせに結びつくように頑張らね、その代わり他人のしあわせに文句を言うな、と厳しく言っています」。今、武内先生が大切にしているのは、「流浪しないように『根』を作ること」「地域、人を支えることが『しあわせ』と感じられる感性の再生」いつでも発信できる表現力」と「他と連帯できる協調性」の育成である。淡々と語られる言葉の重さと深さに、私たちは強く、心を打たれた。

### ●どう、共有するか

最後は、高松第一高校・片山浩司先生、茨城県立取手松陽高校・渡辺隆文先生、大分県立爽風館高校（3部制）・太田恭二先生、本誌・大堀精一によるパ

ネルデイスカッションである。司会は私（福永）が務めた。今回も実践を中心に見る。まず高松第一高校。同校では約10年前から、「総合的な学習の時間」を中心にキャリア教育を展開してきた。例えば1年次の「職業研究」。20数業種の企業人・



大分県立爽風館高校(3部制)  
太田恭二先生



茨城県立取手松陽高校  
渡辺隆文先生



高松第一高校  
片山浩司先生

社会人がブースを設け、生徒は就活しながらに3か所のブースを回る。目的は「視野を広げること」。2年次は学部学科研究を行い、課題研究に入る。

また普通科7クラスのうち、特別理科コースと国際文科コースでは、関東の研究機関や企業、大学を訪問したり、海外でのホームステイを行うなど、さらに視野を広げる試みを行っている。そして授業改善。同校でもSD2期で本格的に取り組む。物理や化学でのALの模様も紹介され、「生徒が身に付けた力は非常に大きい」と語った。

次に渡辺先生は、前任校の茨城県立竜ヶ崎第一高校での実践を語った。渡辺先生は08年1学年主任時、創立110周年の3年後を見据えた「Dream2010」を掲げ、導入期指導「Rプログラム」や教員による「筑波大学研究委員会」等を実施。難関国立大進学者が大幅に増えた。11年3月の国立大後期試験では、大震災に遭遇した生徒もいたが、「一日で大人になって帰ってきました」。今も被災地

との交流を大切にしている。

最後に太田先生も前任校の大分県立大分豊府高校での実践を報告。同校が09年に中高一貫校一期生を受け入れるのにあたり、「内進生と高校からの新入生の融和」を行うべく、太田先生が08年に総合学習主任、09年に1学年主任となった。

それまでの総合学習の理念は「自分と社会を理解し、キャリアを構想すること」。ここをベースに、「言語の獲得による情報収集と表現力向上」を重視。県の専門家によるアサーションやグループエンカウンターの手法も入れ、1年次は「新聞づくり」や「職業講演会」「ディベート」、2年次は「地域研究と英語でのプレゼン」、「豊府大学(学部学科研究)」等を行った。

キャリア教育の「共有」はどうか。例えば太田先生。担任の負担を軽減すべく「総合学習チーム」を募り、企画・準備を一元化。「アイデアも豊富で楽しかったです」。だが校内は「実績のため授業を」の声が強かった。片山先生も「温度差」を指摘

しつつ、「理数系の先生方はデータに弱い。どう伸びるのかを示すと、必要性を共有できません」と説得材料の大切さを語った。

一方、渡辺先生は「管理職の理解は大きい。また模試の成績が伸びたなど、プチ成功体験も大事です。ただし、時には『引くこと』も必要です」と述べた。

今回は進路多様校の生徒の状況も話し合われた。現在、定時制高校に勤務する太田先生は「生徒の多くが家庭で認められていないため、無理なアルバイトも『自分が必要と認められている』と続けてしまう。知っている世界も狭い。高校で学ぶ意味を伝え、なんとか社会につなげたい」と語った。また渡辺先生も「高校では中学校の授業を知らずに授業を押し付けている。中高連携が必要ですよ」と指摘。

先述の「世間知」も含め、どう、生徒の学びを社会へとつなげるのか。フォーラムのテーマがより、重層的に問い直されてきたと言える。来年のフォーラムは8月6・7日に開かれる。

(構成・文／福永文子)